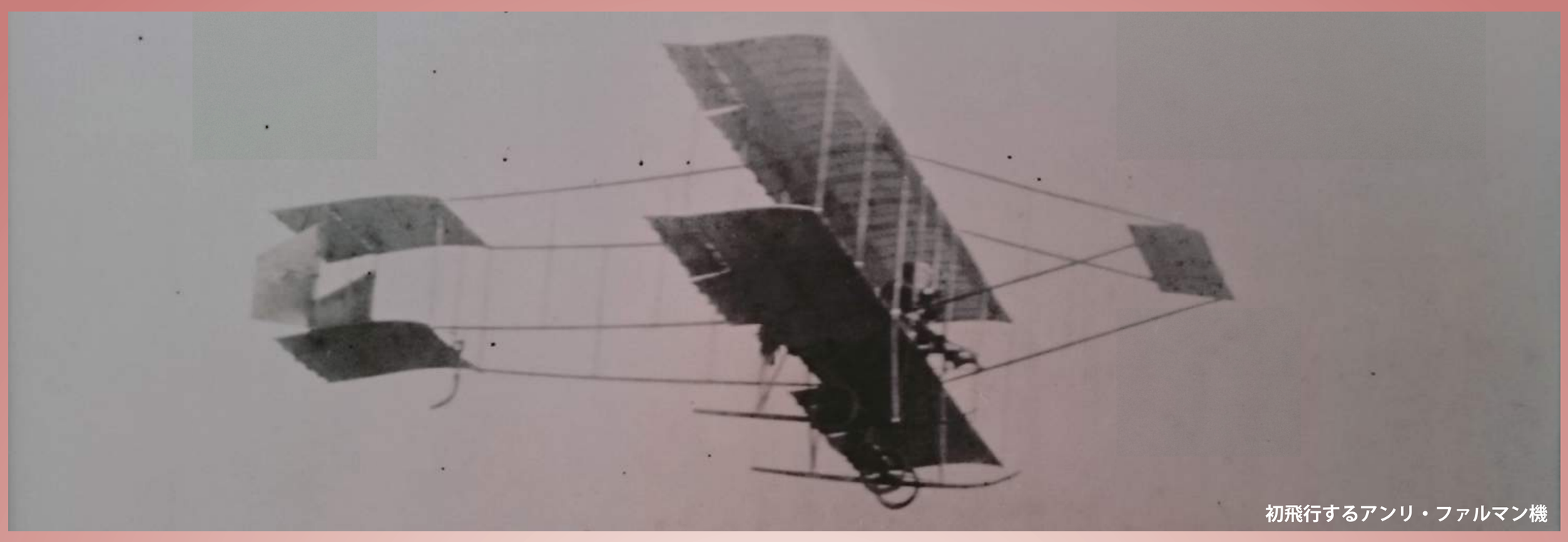
―所沢飛行場ものがたり―

所沢飛行場の初飛行



初飛行するアンリ・ファルマン機

開場を祝う満開の桜と満員の見物客

明治 44（1911）年 4 月 5 日、午前 5 時 37 分、フランス製複葉機アンリ・ファルマン機は所沢飛行場での初飛行に成功しました。同機を操縦したのは徳川好敏大尉。高度は 10 メートル、距離 800 メートル、時間は 1 分 20 秒の飛行でした。この一大行事に際して所沢町民と松井村民は飛行場内に特別観覧所を設けました。観覧席は①来賓・将校・記者席②特別観覧者席（所沢町民・松井村民）③団体観覧者席に区分されました。このほか、町の山田呉服店は周辺に紅白幕を張った酒宴を開いたり、商店街は「祝・飛行場開場」と大書した横断幕を掲げ、日の丸も掲揚しました。

徳川好敏大尉は後に「日本航空事始」と題する本を著わし、その中で初飛行の様子を次のように述べています。「第一回目の飛行演習の時は、花見の時期とも重なり、飛行場の周囲には、腰ににぎり飯をぶらさげてワラジばき姿の見物人がつめかけ、食べものなどの屋台店が出て、まるでお祭り騒ぎであった。母親と思われる 80 歳ぐらいのおばあさんを荷車に乗せて見物に来ていた地元の人らしいお百姓さん、学生などの姿を記憶している。飛行場の西側には地元の人が桟敷席を作り、一人 10 銭の席料を取っていたが、これも満員の盛況だった。」

祭のように見物客でごった返した飛行場周辺

当時発行の一等席拝観券

飛行場の見物客イメージ（この写真は会式機を見上げる見物客）

▼4 月 5 日の初飛行を伝える翌日の新聞記事

（五）　第八千八百五十七號　東京朝日新聞

●所澤の大飛行
▽日本飛行家の成功
▽日野大尉の操縦振

明治四十四年四月六日

日本に於て飛行に最も適當な風のない時は拂曉と日沒頃であるされば所澤に於ける研究會の飛行委員は常に此機會を利用して飛行せんが爲に毎日午前四時頃から起きて風の模樣を窺つて居る

▲未明の音響　五日朝四時半頃目を覺まして見ると雨戸の際から射す光は未だ薄暗いが昨夜まで凄じい勢ひで吹いた風は全く熄んで飛行には最も好い天氣らしい凝して起して窓を押せば遠方の飛行場で推進機の試運轉をする音が微に勇ましく聞ける門前を飛んで行く馬蹄の音も聞ける飯を喰つて居る暇もなく お印許りに顔だけ洗つて直に洋服引被げて田圃道を急ぎ息きつて飛行場へ驅付けると夜はほのぼのと明けて東の空には薄紅色を帶びた雲が重さに垂れ茫々たる飛行場の薄靄の裡にファルマン式複葉飛行機は格納庫の脇に輕く横たはつて居る所澤町の觀覽席には數十人の見物が寒さに立つて居た

▲徳川大尉の飛行　もう夜は明けたが空は曇つて居るので何處となく薄暗い飛行場の中に立つて居る將校や委員の方もぢんよりして能く見ねぬ併し風が全く死んでそよともせぬ五時過ぐる十分徳川大尉は極めて落付いた態度でファルマン式に搭乘し推進機の勇ましき音と共に出發し愈〻五六十米突も滑走したかと思ふと地上を離れ十米突乃至二十米突の高さで東方に向つて飛行した次第に場内のコースに沿つて飛行したが何故か推進機の音がだん〻弱くなり半圍を描いた許りで場の北方に降下して了つた此飛行距離凡そ千二百米突忽ち自動車が行く田中館博士は自轉車で驅け付ける甕て四五分すると飛行機は再び推進機の音を響かせて北東から南の方に向つて滑走したが遂に飛行せずに終つた即ちファルマン式は昨日の烈風の爲に發動機へ砂が入つて十分力を出す事が出來なかつたのである

徳川大尉　日野大尉

▲勇しき日野大尉　ファルマン式が格納庫に入ると共に彼の有名なライト式複葉飛行機が現れた搭乘者たる日野大尉は見れば新調の漆黑な飛行服に身を固めて彼の陸軍から贈られた飛行帽を被り嬉〻姿颯々四邊を拂ひ飛ばぬ前から大に活躍せんとするの氣を示して居る午前六時二十分飛行機は大尉の相圖と共に支へられたる職工の手から離れ四五十米突を滑走して飛揚し同じく場内のコースに沿つて暢氣らしく飛ぶ鳥の群を驚かして一周し又一周し更に半周して降下した此飛行の高さ五十米突距離四千米突（日本の一里）時間を費す事廿三秒此時分から無風であつた空には微風が出て觀測臺の報告に依れば三四米突の風速があつた

所沢航空発祥記念館